

---

# 気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

零堵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

### 【Nコード】

N9433Z

### 【作者名】

零堵

### 【あらすじ】

俺こと、初崎孝之は、気が付いたら、魔国、エデルドと言う所にいた。

そこで出会ったのは、魔国の魔王、マイ三世だった。

元の時代に戻りたかったが、全く帰り方が分からず、マイ三世に「帰る方法は？」と聞いた所

「そんな事より、私の部下になれ」と言われ、結局俺は、マイの部下になってしまった。

これから、どうなるのか全く分からなかったが、なんとか頑張っ

いこうと思っていたのである・・・気がついたらシリーズです。  
この作品のほかにも、気が付いたら、攻略されそうです・・・と、  
気が付いたら、攻略されそうです・・・西村舞編があります。ちな  
みにここ出てくるキャラ名は、気が付いたらシリーズを見ると、  
分かるかと思えます。

「プロローグ」魔国に迷い込みました（前書き）

はい、零堵です。

新しく投稿します。

## 「プロローグ」魔国に迷い込みました」

気が付いたら、全く知らない場所にいた。

ここは、どこなんだ・・・？と辺りを見渡してみる。

そこは、部屋の中で、白で統一されていて、明かりも中世の世界に出てきそうなライトで

照らされていた。

窓があったので、窓の外を見て、驚く。

何故なら、伝説上の生き物と言われている、ドラゴンが数十羽飛んでいて

空を見ても、太陽が二つに見えた。

うん、どう見ても、ここは日本じゃないよな・・・と、思われる。

「一体、ここは何所だ・・・？」

俺は、これまでの事を思い出してみる。

確か、家の中で新しく買ったゲームをプレイしようとして、ゲーム機のスイッチを入れた瞬間

気が遠くなつて、この場所にいたと言う訳だった。

自分の服装を確認してみると、服装は意識が無くなる前のそのままで、ジャンパーに長ズボン姿だった。

うん、ひとつ言える事は・・・この世界でこの格好って・・・変じやないか？と、思ってしまった。

「とりあえず、ここから外に出てみよう」

そう思つて、部屋の外に出ようと考えて、扉があったので、そこを開けてみる。

扉をあけると、長い廊下が現れた。

一方通行だったので、その道を真っ直ぐ歩くと、二つの扉があった。右の扉が、赤色の扉で、左の扉が青色をしていた。

俺は、どっちに行こうと迷ったが、覚悟を決めて、赤い扉を開けてみる。

中にいたのは、豪華なイスに座っている。美女がいた。

「貴様、何者だ？何所からこの、魔王の城にはいった？」

「ま、魔王！？」

「何を驚いている、私は第三代魔王の、マイ三世だが？お前の名は？」

「お、俺は初崎孝之、日本人だ！」

「日本・・・？それは、なんだ？」

「に、日本を知らない・・・？じゃ、じゃあここは？」

「ここは、我が魔国、エデルドだが・・・孝之、お前はまさか・・・勇者か？」

「そんな訳ないだろ！？てか、勇者っているの！？」

「もちろん勇者はいるぞ、我に戦いを挑んできて、うっとしいんだがな、まあ、戦うのは暇つぶしに丁度いいんだが」

「丁度いいのかよ！しかも、勇者との戦いが暇つぶし！？」

「何か問題でもあるか？」

「問題あるだろ！？はあ・・・なんか、つつこむのも疲れてきた・・・とりあえず、俺の事情を聞いて下さい」

そう言つて、俺は、魔王マイ三世に、ここに來た事情を話す。

すると、マイ三世は、こう言つてきた。

「ふむ・・・気がつけば、この国に迷い込んだつて言うのか・・・、孝之、お前は元の世界に帰りたいというのだな？」

「はい、出来れば、今すぐに帰りたいです」

「ふむ・・・、決めた、我の部下になれ」

「はい？な、なんで、俺が魔王なんかの部下に！？」

「それはだな・・・退屈だったからだ、勇者も最近現れてないしな、部下も勝手に人間国に遊びに行つてたりするし、しょくじきに言つて暇なのだよ、だから部下になれ、これは命令だ」

「嫌つていつたら？」

「ここから出て行つて、無事でいられるのか？外は、魔族でいっばいだし、仮に人間国に行けても、人間国から、魔国エデルドから來

たつてばれたら、殺されると思うんだが？それでもいいのか？」

「う……」

俺は、考える。確かに、ここから逃げた場合、魔族とかに見つかってやられるかもだし

かと言つて、人間国とかに無事入つても、この国から来たつてばれればどうなるか

分かった物じゃないし……そう、考えて、俺は、こう言う事にした。

「わ、分かった……部下をやつてやる」

「よし、決まりだな、あゝこれから楽しくなりそう！私の事は、マイでいいよ〜」

なんか、一気に魔王の話し方が、がらりと変わったので、質問してみる。

「なんか一気に話し方が、変わったんだが……？」

「魔王のイメージって大切でしょ？初めてきた相手には、そういう話し方してるだけよ？別にいいじゃない」

「それでいいのか……？」

「いいの、そうね……貴方の事は、孝之と呼ぶわね、じゃあ、孝之、貴方の部屋を用意させるわ、スミレ！出てきなさい！」

マイがそう言うと、天井がパカッと開いて、一人降りてきた。

「マイ様、お呼びでしょうか？」

「孝之は、あの部屋を使つてもらうわ、案内してきてくれない？」

「かしこまりました、マイ様、では、孝之様、ご案内します」

「あの一つ質問にいいですか？」

「はい？なんででしょう？」

「なんで……メイド服なんです？」

そう、スミレと呼ばれた人の恰好は、カチューシャにメイド服を着ていた。

あまりにも場違いだろ！？と思うのだが……

「これは、私の趣味で着てるだけですが？何か問題でも？」

「い、いえ・・・」

「では、孝之さま、部屋にご案内します、ついてきて下さいませ」

「は、はあ・・・」

「じゃあね？孝之、何か用があつたら、呼ぶわよ」

「了解・・・」

そうマイが言う。俺は、そう答える事にした。

スマレと呼ばれた人に、案内されて、一端部屋を出て長い廊下を歩き、一つの部屋に、たどり着く。

部屋の前にたどり着くと、スマレがこう言ってきた。

「ここでございます、では、ごゆるりと、っは！」

そう言つて、スマレはジャンプして、天井がパカッと開いて、そこに消えていく。

うん・・・何なんだ？この仕掛けて・・・、そう思いながら、部屋の中に入り

ベットがあつたので、そこで休む事にした。

なんか、疲れたので、これからの事は考えない事にしてさっさと休む事に決めて、目を閉じたのであつた・・・



「プロローグ」魔国に迷い込みました（後書き）

はい、零堵です。

新しく投稿します。

できる限り続けようと思っております。

〈第一話〉魔法を覚えよう〈初級編〉（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第一話〉魔法を覚えよう〈初級編〉

目が覚めて、まわりを確認してみても、元の世界に戻ると言う事はなく

魔国、エデルドと言う場所だった。

やっぱり戻ってないんだな・・・と改めて実感、ま、来ちゃったものはしゃくはないか・・・と思い

どうしようかと悩んでいると、コンコンと音がして

「孝之様、入ります」

そう言った瞬間、扉がバカッと開いて、部屋の中に入ってきたのはメイド服を着た、スミレさんだった。

「よく、お休みになられましたか？」

「いや・・・うん、あのさ・・・」

「はい？」

「なんで、扉をぶち破る必要があるの・・・？」

さっきの一撃で、扉は五メートルぐらい吹っ飛んでいた。

うん、かなりの馬鹿力じゃないか？と、思うんだが・・・

「気にしないで下さいませ、あとで直しますし」

「いや、気にするよ!？」

「そんな話は置いといて、孝之様、マイ様がお呼びですので、ついできて下さい」

「あ、うん、分かった」

そう言って、俺は、スミレさんの後ろをついて行く事にした。

部屋の中を出て、長い廊下を真っすぐわたり、赤い扉をくぐると、王座に座っている

マイ三世がいた。

「マイ様、孝之様をお連れしました」

「Okよ、じゃあ行きなさい」

「は！承知しました」

そう言つて、スミレは、ジャンプして天井に消える。

うん・・・ほんとにこの人、何者なんだ？と思うんだが・・・

「よく休めた？」

「まあ・・・休めたと言えば、休めたけど・・・ところで、一体俺に、何の用事だ？」

「孝之の身体能力が、どれぐらいかを知りたくなつてね？孝之、魔法つて使える？」

「使えるわけないだろ、普通の一般人だし」

「その一般人と言う概念が私には分からないけど、じゃあ・・・魔法を覚えてみる？」

「魔法つて、俺にも出来るのか！？」

「魔力が、あれば誰にでも出来るわよ？ちよつと魔力を調べてみるわね」

そう言つて、マイは、何か呪文らしき言葉を言う。

「サーチャースタイル」

そう言つと、俺の体が薄く光りだし、目の前に数値が現れた。

「ふむふむ・・・」

「で・・・ど、どうなんだ？」

「孝之、魔力が物凄いわよ？というか、私とほぼかわらないんだけど？何これ？」

「変わらないつて・・・魔王と同じ魔力があるつて事？」

「そう言う事になるわね・・・あ、なんだつたら、魔王、貴方がやる？私、譲つてもいいわよ？」

「冗談言わないでくれ・・・」

「冗談じゃないのにな・・・ま、いいわ、魔力はあるみたいだし、早速魔法を教えるけど、どんな魔法がいい？」

魔法か・・・まさか自分が使えるとは、思つてなかつたな

日本じゃ、魔法なんてある訳がないし・・・まあ、とりあえず・・・

「じゃ、じゃあ基本的な初歩の魔法から、学びたいんだが・・・」

「初歩ね？めんどくさいわね？大陸を落とすメテオ級の術とか、そ

ういったのを得意なんだけどな〜・・・」

「・・・さすが魔王と言った所なのか？冗談にしても、笑えないんだが・・・」

「まあいいわ、初歩ね？じゃあ、部屋の中で使うのもなんだし、外に行きましよう」

「わ、分かった」

そう言つて、俺とマイは、外に出る事にしたのであった・・・

〈第一話〉魔法を覚えよう〈初級編〉（後書き）

年内、最後の投稿となります。

この一年、結構書いたって感じですかね？

来年もよろしくです。

気が付けばシリーズは、他にもあるのでそちらも読んでみてくださいませ。

〜第二話〜魔法を使ってみよう〜初級編〜(前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第二話〜魔法を使ってみよう〜初級編〜

俺は、魔法を習うために、外に出る事にした。

外に出てみると、生あつたかい風が吹いていて、草が一本も生えて  
いなく。

地面が・・・なんか、青かった。

色的にここは、土の色の茶色だったり、草の色の緑だと思ふのだが・  
・

見渡す限り、真っ青な地面であつた。

「なんなんだ・・・この青い大地は・・・」

「ああ、ここは魔国エデルドの中でも、唯一珍しい、ブルーアース  
と呼ばれる場所に、魔王城を建てたのよ、ちなみにこの地面は、魔  
力が含まれてるから、食べると魔力が回復するわ」

「え、食べられるの!？」

「ええ、食べられるわよ?但し、目茶目茶不味いけどね?」

「そうなのか・・・」

「じゃあ、早速初步の魔法から、教えるわね?まず、魔法には、火、  
水、風、土、光、闇の六種類あつて、最初に教えるのは、火の呪文  
よ?小さい火を思い浮かべて、こう言うの、フレアス!」

そうマイが言った途端、マイの指先から小さい火がぽつと出現した。  
「これが、第一段階のフレアスって言う火の魔法よ?ちなみにこれ  
を強化すると、フレアードと呼ばれる火の球になつて、さらに強く  
すると、フレアボールと言う火炎球になるわ、じゃあ、まず最初に  
このフレアスを、やってみなさい」

「分かった、やってみる」

俺は、そう言つて、小さい火を思い浮かべる。そして

「フレアス!」

そう叫んだ。だが・・・

数十秒待つても、小さい火は全くできず、俺は焦って何回も叫ぶ。



「フレアス！フレアス！フレアス！フレアス〜！！」  
いくら叫んでも、全く小さい火は出なかった。

「う〜ん・・・どうやら、孝之、貴方は火の呪文は一切使えないみたいね・・・」

「そ、そうなのか？」

「ええ、普通なら子供でも習えば、出来るのだけど・・・」  
「ガン・・・俺は、子供よりも劣っているというのか・・・」  
ちよつと、シヨツクだった。

「ま、まあ・・・気を取り直して、次の呪文を教えるわよ？じゃあ、次は、水の呪文ね？水の呪文は、火の呪文と違って、イメージしにくいけど、まず流れる川をイメージして、そしてこう言うの、アクアス！」

そう言うのと、何も無い空間から、水が出現して、水鉄砲が一回撃てる量だった。

「これが、水の呪文よ？さあ、孝之、やってみなさい」

「あ、ああやってみる・・・」

そう言うって、俺も頭の中でイメージして、こう言う。

「アクアス！」

しかし、さつきと同じく、全く反応がなかった。

「マイ・・・俺って、もしかして出来ないのか・・・？」

「う〜ん・・・ま、まだ分からないわよ？とりあえず、色々やってみましょう？」

そう言うって、マイは風の呪文、土の呪文、光の呪文を俺に教えてくれたが

俺は、そのどれも使えなかった。

ここまでくると、ちよつとやさぐれるぞ・・・

「もしかして・・・孝之って」

「な、何？」

「闇の呪文しか、使えないのでは？」

「え・・・闇の呪文？」

「そう、じゃあ初歩の呪文を言うわね・・・シャドースネイク」

そう言うと、マイから黒い何か飛び出して、マイの形になった。

「これは？」

「これは、私の影ね、この影を相手に飛ばして、相手を動けなくすると言う呪文よ？孝之、やってみてくれない？」

「あ、ああ・・・」

俺は、そう言って、マイと同じ言葉を言ってみた。

「シャドースネイク・・・」

そう言った瞬間、二体の影が出現して、俺と同じ大きさになった。

「やっぱりそうだわ、孝之、貴方、闇属性の呪文しか使えないみたいよ？」

「そ、そうなのか・・・ま、まあ、これが俺の初めての魔法なんだよな・・・」

マイに一属性しか使えないって言われたけど、初めての魔法にちょっと、興奮してしまった。

「なら、闇属性中心の魔法を教えろとしましょうかね？っと、今日はもうここまでにしましょう？」

「ま、まあ、そうだな、ちょっと疲れたし、ところで・・・これ、どうやって消すんだ？」

俺は、自分の二体の影を指さす。

「解除する場合は、ドロップと言いなさい、魔法をキャンセルされるから」

「解った、ドロップ」

そう言うと、二体の影は、ぱっと消失した。

「まあ、これで孝之は、ひとつの魔法を覚えたってことよね？」

「まあ、そうなるかな？」

「それじゃ、お腹もすいた事だし、城に戻るわ」

そう言って、マイは魔王城の中に入っていく。

俺も、マイの後について行く事にしたのであった・・・

〜第二話〜魔法を使ってみよう〜初級編〜（後書き）

補足

孝之が覚えた技

シャドー・スネイク、自分の影を呼び出して、相手の動きを封じる技  
うまく使えば、気づかれずに暗殺も可能

はい、零堵です。

あけましておめでとございませう、今年もよろしくです

〜第三話〜どう見ても、ゲテモノなんですが・・・(前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

く第三話くどう見ても、ゲテモノなんですが……

魔法を一つ覚えて、魔王の城の中に入った

魔王の城と言っただけあって、結構広い、と言っか……

迷いそうなんだが……

「お腹すいたから、食事にしよ？」

「あ、ああ……ところで……」

「何かしら？」

「ここで、出される食事って、一体何なんだ？」

「それは、ついてからの楽しみよ、さ、こっちよ」

魔王のマイ三世が言ったので、俺は、マイの後について行く。

辿り着いた場所は、広々とした空間に、テーブルが置いてあった。

テーブルの上に、燭台が置いてあり、そこにゆらゆらと明りが灯さ  
れている。

「さ、ここで待つがいいわ、すぐに料理が来るから」

「そうなのか……ところで、その料理って誰が作るんだ？」

「私の部下の、ユウよ」

「ユウ？」

聞いた事無い名だった、まあ料理を運んでくると思っので、気長に  
待つ事にした。

待つ事数分、奥の部屋から「お待たせしました」と声が聞こえて、  
黒髪のスーツを着た者が

料理を持って、テーブルの上に置いた。

「孝之、紹介するわね？我が魔王城の料理担当の、ユウよ、で、こ  
っちが、新しく我が魔王軍に入った、孝之」

「初崎孝之です」

「ボクは、ユウ、ここの料理を全てまかされてるから、お腹が空い  
たら、ボクに言ってね？」

「あ、うん」

声が高かったので、女だと思った、まあ男装してる奴って、前の世界でも結構いたし

別に問題はないか・・・と、思ったのである。

「で、ユウ、今日の料理は何？」

「っは、今日の料理は、クレーメルの姿焼です」

「そう、クレーメルなのね、これは美味しそうだわ、じゃあ、早速戴くわ」

「っは、マイ様、こちらになります、孝之も食べる？」

「あ・・・」

「何か？」

「そのクレーメルって言うのを、よく知らないんだが・・・どういったものなんだ？」

「そうですね・・・一言でいえば、肉・・・だと思います」

「はあ・・・肉ですか」

全く、想像できないんだが・・・

「はい、どうします？食べますか？」

俺は、どうしようか悩んだが、お腹すいてるので

「じゃあ、戴きます」

「了解しました、孝之の分も、持ってきます」

そう言っつて、ユウは、奥の部屋に入る。

そして、数分後

「お待たせしました、クレーメルの姿焼です」

そう言っつて、出された料理を見て、驚いた。

クレーメルの姿は、角が生えていて、手が三本あり、目が三つあって、体の色が緑色をしていた。

焼いたからか、くすんだ緑色になっている。

これ・・・食べるのか？と、思っつてしまっつのだが・・・

「どうしました？孝之」

「い、いや・・・」

マイを見てみると、美味しそうにバクバク食べている。

うん、見た目はグロテクスだけど・・・うまいのか？これ・・・俺は、どうしようかと悩んだ末、勇気を出して、食べてみる事にした。

「いただきます！」

恐る恐る口に運ぶ、感触が粘ついて、かなり気持ち悪かったが味はと言つと・・・

「あ、うまい」

「お口に合つて、よかったです」

「美味しいでしょ？見た目は、変だけど、これ、いけるのよね」

「確かに・・・、見た目は気にしないようにして、食べよつと」

そう言つて、食べまくる。

そして、数分で完食した。

「美味しかった、ユウさん、料理上手だなあ・・・」

「ユウでいいですよ、ボクも孝之つて言いますね」

「あ、うん」

「じゃあ、ボクは、洗い物がありますので、これで」

そう言つて、ユウは、奥の部屋に行った。

「ふく、食べたし、孝之、これからどうする？」

「これから・・・じゃ、じゃあ、この魔国エデルドの事を知りたいんだけど」

「そうね・・・じゃあ、出かけましょうか？私が、魔国を案内するわ」

「・・・つて、いいの？一応魔王じゃないか？」

「いいの、別にいなくなつても、問題ないしね？じゃあ、早速行くわよ？」

「あ、ああ・・・」

こうして、俺は、マイ三世と一緒に、魔国、エデルドの中を見て回る事に決めたのであった・・・

〜第三話〜どう見ても、ゲテモノなんですが・・・（後書き）

補足

クレールメル＝角が生えていて、手が三本あり、二足歩行をする生き物の色が緑色になっていて、色違いが存在する。  
ちなみに、緑色が美味、茶色が激マズとなっている。

零堵です。

新キャラ、ユウを登場させました

お気づきかと思いますが、このシリーズを読んでくれた方は、このユウが誰なのか  
解るかど、思います〜



〜第四話〜魔国エデルドを見てみよう〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

## 〜第四話〜魔国エデルドを見てみよう

俺は、魔王と一緒に、魔国、エデルドの中を移動する事にした。

魔王城の外に出て、魔王のマイ三世が、こう言ってくる。

「孝之、移動手段はどうする？徒歩で行くと、かなり時間かかるし、竜で旅する？」

「竜って、あの飛んでる奴の事？」

「そうよ、あれがこの国でよく出没する、竜の飛竜よ」  
へ〜・・・あれが、そうなのか・・・

ドラゴンってゲームとかノファンタジー物でみた事は、あったのだが実際に見るのは、初めてだったので、すげえな・・・と思ってしまう。

「じゃあ、飛竜に乗ってみたいかも・・・」

「そう、じゃあ、呼ぶわね？」

そう言っつて、マイは、指を口に含み、指笛を吹く。

すると、ギャオーーンと叫んだ、竜が地面に降り立った。

改めて近くで見ると、結構大きい、しっぽに翼も生えてるのでマジモンのドラゴンなんだな・・・と、実感してしまった。

「このドラゴンに乗って、この国を案内するわ、さあ、乗るわよ」  
そう言っつて、マイは、竜の背中に飛び乗る。

竜は、いきなりの事で驚いて、暴れたが、マイが竜を見て、睨みつけると

竜は、ビクツと反応して、大人しくなった。

うん・・・一体、何したんだ？

「さあ、準備出来たわ、孝之も乗りなさい」

「あ、ああ」

そう言っつて、俺も竜の背中に乗る。

乗り心地は、結構固く、股がちよっと痛かった。

「じゃあ、出発するわよ、行きなさい！」

そう、マイが言うと、竜が叫び声をあげながら、上昇した。その反動で落ちそうになったが、なんとか必死に竜に捕まっていたので、落とされる事は無かった。

竜は、上昇しながら移動する。

上空から見た、魔国エデルドは、色的に見てみると、赤く染まっていた。

地面も赤っぽくて、魔物と思われる生物が、沢山いるのを確認する事が出来た。

「すげえ・・・一体、どのぐらいの生物がこの国に・・・？」

「約十萬ぐらいかしら、まあ、生まれたり、人間に倒されたりしてるから、よくわからないわね」

「そうなのか・・・」

「広さは、大きいと思うわよ、ちなみに隣が人間国のアストールと言う国になってるわ」

「アストール・・・」

いずれ、その国に行く事になるかもしれないので、俺は、その国の名前を覚えておく事にした。

竜で移動して一時間ぐらいが経過して、魔王城に戻って来る。

竜から降りて、マイがこんな事を言ってきた。

「どう？孝之、この国は気に入った？」

「うーん・・・まあ、俺はここに居るわけだし、気に入らないと駄目だよな・・・やっぱ」

「まあ、そうよね・・・つと、もうこんな時間ね、日もそろそろ沈むし、城の中に行きましょう」

「分かった」

そう言って、竜を逃がして、俺とマイは、魔王城の中に入る事にした。

魔王城の中に入ると、この魔王城で、何故かメイド服を着ているスミレが

マイ様って言って、やって来て、こう言うってくる。

「マイ様、情報が入りました」

「情報って？」

「勇者が、この魔国エデルドに侵入したそうです、奴の目的はマイ様かと……」

「「そう……うふふふ！面白くなってきたわね、孝之！」」

「な、なんだ？」

「私と一緒に来なさい、勇者に逢うわよ、貴方は私の部下だから、私の命令は絶対よ？いいわね」

「あ、ああ……分かった」

マイが、そう言ったので、俺はマイのあとをついて行く事にした。勇者って一体どんな奴なんだ？と思ったのである……

く第四話く魔国エデルドを見てみようく（後書き）

この物語も、投稿します。

気が付いたらシリーズは、他にもあるので

そっちも興味があったら、見てみてくださいませく

く第五話く魔剣をもらいました・・・く(前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

く第五話く魔剣をもらいました・・・く

メイド服を着たスミレの情報により、魔国エデルドに勇者らしき人物が進入したって言うので、俺は、こう考える。

勇者って、一体何者なんだろうな・・・と、考えたら、まあ勇者と名乗っているあたり、伝説の剣とか装備して、女にモテモテで、正義の強い奴だとは思っけどな・・・

そう思っていると、魔王のマイ三世が、俺にこう言ってくる。

「孝之、何を考えてるかは知らないけど、勇者と出会ったら、戦いなさい?」

「っは?俺が・・・戦う?」

「そうよ」

「何故だ?」

「だって、私の部下だし?」

確かに、俺は、マイの部下になる事を、了承したが、勇者と戦うとか一言も言っていないぞ?

「ちなみに嫌だと言ったら?」

「そうね・・・?私の命令が聞けないって言うのなら、クレームの茶色いのを無理やり食べさすわよ?ちなみに味は、激マズよ?」

「・・・う・・・それは、なんか嫌だ・・・はあ・・・分かったよ、戦えばいいんだろ?」

「物分りがよくて、助かるわ」

「ところで、武器とかないのか?手ぶらで勇者に挑むとか、無理ありすぎると思うんだが・・・」

「武器か・・・そうね・・・、あれが使えるかしら、スミレ!」

マイが、そう言つと、メイド服を着たスミレさんが、こう言つ。

「っは、何でしょう?マイ様」

「武器庫から、あの剣を持ってきて、孝之に与えるわ」

「かしこまりました、少々、お待ちください」

そう言つて、スミレは天井に飛んで、消えていく。そして数分後、再び天井が開いて、一本の剣を持ったスミレが、戻ってきた。

「マイ様、お待たせしました」

「うん、じゃあ、その剣を孝之に渡して？」

「かしこまりました、孝之様、マイ様の命令により、この剣を授与します」

そう言つて、俺に剣を渡してきた。

俺は、その剣を受け取つてマジマジと見てみる。

剣先が黒光りしていて、色も真っ黒だった。いかにも魔王が持ちそうなアイテムだと思つてしまった。

「あの・・・これつて、もしかして、魔剣とかそういう類の物？」

「まあ、そうよ、この剣は、魔剣ストライズ、魔力を吸い込んで、エネルギー・弾を発射出来る、由緒正しき魔剣よ」

「こんな豪華な物を俺が頂いてもいいのか？」

「別にいいわよ、この他に魔剣つて、あと数本は持つてるし」

「そうなのか・・・」

「ちよつと振つてみなさい」

「わ、分かった」

そう言つて、俺は、魔剣、ストライズを振つてみる。

風を切る音がし、剣先から黒光りするエネルギー弾が現れて、そのエネルギー弾が真っ直ぐ飛び、近くの壁を意図も簡単に吹っ飛ばして、穴を開けた。

「さすが、魔剣ね？物凄い威力だわ」

「てか、やばいだろ！？これ・・・、振っただけでなんか体がだるいぞ・・・」

「まあ、魔力を吸い取つてるからね、ちなみに吸われ過ぎると、死ぬ事もあるわよ？」

「それを先に言ってくれ！うわ！どんどん吸われてくのがわかる・・・うっ・・・気を失いそうだ・・・」



「しょうがないわね、スミレ」

「っは、孝之様、これをお使い下さい」

そう言つて、スミレさんは、剣をしまつ鞆を渡してきた。

「これで、この魔剣、ストライズをおさめて下さい」

「わ、分かった」

そう言つて、俺は鞆に魔剣を入れる。

すると、気だるい感じが一瞬で消え去り、気分も戻つてきた。

「な、何とか助かった・・・」

「魔剣も渡したし、あとは、勇者が来るのを待つだけね、さてと、魔王らしく王座でも座つて、待つてる事にしようかしらっ」と

「では、私は、情報収集に行つて参ります」

そう言つて、スミレさんは、再び天井に消えていく。

うん、本当に何者なんだろう・・・この人・・・

マイは、王の間と書かれた部屋に行き、そこに設置してある王座に座つた。

「ところで・・・俺は、何所にいれば？」

「その辺でいいわよ、勇者が来たら、魔王の部下らしく名乗りを上げて、戦つてね？」

「はあ・・・」

結局戦う羽目になるのか・・・俺は、なるべくなら殺したくないな・・・と、思いながら

勇者の到着を待つ事にしたのであつた・・・

〜第五話〜魔剣をもらいました・・・（後書き）

補足、魔剣ストライズ

魔力を吸収して、エネルギー弾を撃つ事が出来るすぐれもの  
ただし、魔力を吸われ過ぎると、死にいたる可能性もあり  
刀身が黒光りしていて、切れ味も抜群

零堵です。

この物語もよろしくです〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9433z/>

---

気が付いたら、魔王の部下になってました・・・

2012年1月6日20時48分発行